研究

児玉源太郎と長岡外史

会員　山神利勝

はじめにかえて

徳山地方郷土史研究会誌の紙面を割いていただく前に突然申し上げます。下松市は平成二七年、笠戸島に「郷土資料展示収蔵施設」構想。二八年、具現化着手、展示諸案件協議（長岡外史顕彰会・他、関係諸団体も出展）。㈶山口県ひとづくり財団第四年次「平成の松下村塾」第三回一一月五日「島の学び舎」で「長岡外史」開催。付記：第一回（七月）伊藤博文、第二回（九月）岡藤五郎しました）。

本報文は、「児玉源太郎と長岡外史」の逸話を加筆・訂正（塾生募集要項、小学三年生～中学生含む二・三世代家族・グループが対象の漢字配当表によるルビは削除

深慮遠謀の人 児玉源太郎

児玉源太郎については、周南市立中央図書館常設展・周南市立美術博物館常設展・児玉源太郎顕彰会活動・文献等々、遍く知られており、本報は児玉源太郎の逸話のみ紹介。

一八七四年（明治七）、佐賀の乱。児玉歩兵大尉は手に銃創を受け、福岡仮病院に収容され、久留米病院長の後藤が処置。一八八七年（明治二〇）、児玉大佐は陸軍大学校長を兼務。一八九一年（明治二四）、児玉少將が

欧州視察の年、大津事件での応急処置も陸軍省の後藤医師。一八九五年（明治二八）、大本営参謀・児玉少將は臨時検疫部をも兼補、中央衛生会代表の後藤を抜擢。似島・彦島・桜島に臨時検疫所を設け、帰還兵二三万人の検疫を実施。日清戦争終結直後からロシア南下への備えが密かに始まる。一八九七年（明治三〇）、児玉中將は日本独自の海底ケーブル敷設船で、「九州～台湾」間を海底ケーブルで繋ぎ、更に英国のインド・アフリカ回線と結んだ。後年、バルチック艦隊が喜望峰やインド洋を周回している情報は、刻々と日本に送られてきた。この児玉ケーブルは、朝鮮半島と日本間等、日本周辺にも張り巡らされ、朝鮮半島沖に錨泊していた連合艦隊旗艦・三笠と東京大本営とは電信による通信が可能となった。日清戦争終結・馬関条約で高砂島（台湾）を割譲され、初代樺山総督・二代桂総督・三代乃木総督。一八九八年（明治三一）、四代総督児玉中將は、民生局長に後藤新平を任命。一八九九年（明治三二）、参謀総長川上操六逝去により再編した参謀本部。さらに一九〇三年（明治三六）、参謀次長田村怡興造逝去による人事難航の折り、内相と文相兼務の児玉源太郎自ら降格人事の奇策による打開案。それは来たるべき日への備え、満州軍総司令部総司令官・元帥大山巌、総参謀長・陸軍大將児玉源太郎と大本営参謀本部総参謀長・山縣有朋、参謀次長・長岡外史の臨戦構想!!

一九〇〇年（明治三三）、陸軍大臣兼台湾総督の児玉中將。一九〇二年（明治三五）、陸軍次官兼軍務局長の児玉中將。一九〇三年（明治三六）、内務大臣兼文部大臣の児玉中將自ら参謀次長への降格人事を画策。兵器、弾薬の国内生産力を高めるため、製鐵・軍需工場等の重工業振興策。戦争資金調達のため財界トップ渋沢栄一の説得と米英での戦争国債募集案。陸軍省の予算をも海軍省に廻し軍艦二隻を新たに調達。さらには、外務大臣小村寿太郎や伊藤内閣当時の司法大臣金子堅太郎の留学先ハーヴァード大学の同窓、アメリカ合衆国大統領セオドル・ルーズベルトへの下工作等々、いま出来ること、対策すべきこと・・・　児玉源太郎の持てる職権と人脈を総

動員。

一九〇四年（明治三七）、日露戦争勃発。陸軍大將児玉は満州総司令部にあって満州軍総参謀長兼台湾総督。海戦は東郷長官率いる連合艦隊がバルチック艦隊を敗走させ、一九〇五年（明治三八）三月二八日、講和作戦のため帰朝、桂首相を説得。五月二八日、ポーツマス講和条約調印。一九〇六年（明治三九）七月二二日、満州鉄道設立委員長・児玉大將は、自邸に後藤新平を呼び、満鉄創立と使命に付いて隔意なく語り、初代総裁を引き受けるよう説得するが、後藤が固辞し帰宅にも頓着せず、その夜、心安らかに深い夢路を辿った。翌二三日、些の苦悶の跡もなく、奇才として群雄中に卓絶した巨人は、劫久の眠りから亦醒めなかった。五五歳の生涯であった。児玉源太郎の遺訓、「仏国パリ街路を見てこい・・・」。満鉄総裁に就任した後藤、満州の荒野に広大な都市を建設。さらに後年、後藤内務大臣、関東大震災復興の任にあって今日の世界都市・東京の原型をも創造した。

長岡外史の生いたち

長岡外史は、一八五六年（安政三年）、都濃郡末武村（現下松市）堀家に生まれ、忠蔵と名付けられた。生まれるとすぐ母親 時から引き離され、その上、父親の顔も知らないまま、伯母の嫁先・守田家（熊毛郡小周防・現光市）に預けられるという、数奇な運命を背負って生きなければならなかった。物心のつく年頃ともなると、手のつけられないほどの餓鬼大將に育ち、近所の人から、守田の悪童といわれて成長した。それがもとで、八歳になると実家である末武村の堀家に帰され、花岡の石田塾で漢学と和算を学んだ。だが、忠蔵の悪童ぶりは衰えるどころか、かえってひどくなったという。忠蔵の実家・下之堀家（屋号）は大庄屋、花岡勘場の勘場役人を務めていたが、父なし子としての運命を背負っている忠蔵のここでの生活は、決して恵まれてはいなかった。いつも孤独のなかで堪え忍ぶ一匹狼として生きるほかなかった。幼い忠蔵がここで見たもの心に映ったものは、村の顔役や塾の師・僧侶・神官、勘場地下役人たちである。

軍人になる

一八六七年（慶応三）、十一歳になった忠蔵は、長岡弥九郎（南陽）の養嗣子となって萩に移り、主君井原主計から昱輔（長岡昱輔源護朝）という名をもらって武士となり、門田塾で書画や茶道を学ぶ。だが子供心に描いた武士は昱輔の考えとちがい、元来は百姓の子、長岡家といっても身分の低い陪臣ということもあって、塾に通う友達からは仲間外れにされることがしばしばで、この口惜しさはじっと堪えるしかなかった。ところが世は明治となって時代は変わり、「士農工商」制度が廃止されて四民平等となった。一八七〇年（明治三年）、十四歳になった昱輔は、山口明倫館の文学寮小学舎に寄宿して勉強。ある日、「日本外史」を暗誦しているところを旧藩主毛利元徳公に認められて外史という名をおくられ長岡外史と改める。藩籍奉還で養家は阿武郡（現阿武町）移転、外史も養家に帰った。時は明治八年、世は正に維新の風雲時代。十九歳の多感な青年は、郷党である長州人の活躍をよそ目に見て、功名心に燃えて断りもなく家を出た。偶然、東京の臨時士官生徒募集を知り、上京して応募。

航空にかける（その一）

一八七二年（明治五）、学制頒布（小学・中学規則）により山口明倫館は山口中学校と改められ、外史は山口中学二年で退学して阿武郡長野の養家へ帰り、阿武川の川原の開墾を手伝った。明治八年、上京、陸軍兵学寮―陸軍教導団―陸軍士官学校に進む。明治一六年、陸軍大学校入学。卒業前の「参謀旅行」、自然の山野に臨んで行う近代的用兵演習を学ぶ。思えば、山口明倫館で学んだ「日本外史」。江戸時代後期の儒学者・頼山陽の視点で述べた漢文体の通史二十二巻に加え、源平から徳川までの決戦対陣布陣図の解説巻を含む、政権争いの机上学習。明治一八年、同大学校卒業。明治二七年、大島混成旅団参謀・第一軍兵站参謀長として前戦（日清戦争）で指揮。一九〇三年（明治三六）、アメリカのライト兄弟

がノースカロライナ州キティーホークで飛行機の初飛行に成功。日本では、明治四二年、寺内陸軍大臣は航空機関設置のため、六〇万円の予算をとり、陸海軍大臣監督のもと、官民合同の臨時軍用気球研究会をつくって、初代会長に長岡外史を選んだ。

雪を征服

スキーが日本に入ってきたのは、一八九五年（明治二八）、松川敏胤大佐がドイツ留学を終えて帰国の際、露満国境からスキー一台持ち帰ったのが最初。明治三五年、ロシア南下に備え演習の遭難（八甲田山雪中行軍陸軍兵二一〇名中の生存者一一名）。明治四二年、スウェーデンの杉村虎一公使から届いたスキー二台と教則書三冊。寺内陸相は、長岡師団長に送るよう指示。「こんな新しいもの、むつかしいものは、あの長岡にやらせるに限る」。翌四三年一月五日、高田（現上越市）第一三師団長室にレルヒ少佐が赴任挨拶にきた時、外史はドイツ語でレルヒに、「君がスキーの達人であることは承知している。軍事研究の余暇を利用して、スキー術を我々のスキー研究委員に教えてもらいたい」、「研究委員から一般の人たちにと細胞式に普及したいと思っている。何しろ、雪を征服するには、このスキーに限るからな」。同年三月一一日、宮中で恒例の全国師団長会議の席上で外史は奏上した。「このスキーを軍隊はもちろんのこと、一般民衆、特に学校の教師、鉄道、営林、逓信等の従業員、学校生徒、婦女子に奨励しております…　等々。以下割愛」。

航空にかける（その二）

臨時軍用気球研究会は、帝国大学教授と陸海軍人で編成。はじめに考えたのは飛行場用地。一九一〇年（明治四三）三月、銀行倶楽部で初めての飛行講演。四月、研究会と近衛師団の両者立ち会いの上、飛行場敷地を所沢に決定。六月一日、高田一三師団長への発令を受け赴任。外史はスキー訓練奨励や民間航空の育成準備。一二月一九日、研究委員でアメリカやドイツに飛行研修と購入

に行き、操縦して帰任した日野・徳川両大尉が代々木練兵場で初めて日本の空を飛んだ。一九一五年（大正四）、予備役編入。外史は国民飛行協会や民間航空の育成に着手。海外からの飛行家を迎え、自宅も洋風に建替え、自ら「外人飛行家歓迎委員長」と称し歓待。医師岸一太博士独自製作の飛行機「剣号」を外史に贈り、飛行機製作所をも創業。外史は、海外飛行家が飛行実演していない松江・米子・浜田・山口・萩・柳井・高田・小倉・松山や朝鮮・満州・漢口・青島・上海等、飛行講演と実演。なお、実家のある下松は、飛行場に適した場所がなく断念の記録。

その人間性

長岡外史の人間性については、その言動と行動のすべてに表現されているが、なかでも外史の残した遺言状（六ケ条）は、とくに感動を呼び、人びとの心をうつものがある。「大衆と共に行こう、大衆と手をとり合って立とう」が彼の信条であり、とくに人間尊重を理念としたことは、卓越した外史の識見にほかならない。彼のいつもの口ぐせは、「肩書を見て人を知るようではいかん」ということであったが、このことは遺言の中にも表われている。また將軍 長岡外史は閣下という敬称を好まなかった。「長岡さん」と呼ばれることに親近感を感じ、庶民的だとして好感をもっていたことは、外史の人間性を物語るものである。このころの軍人は、馬や馬車での通勤が常であったが、外史はつとめて電車を利用して民間人との接触をはかり、とくに若者は日本の将来の担い手であるといって、誰れ彼れとなく気易く話しかけて会話を楽しんだ。

一九二一年（大正一〇）、外史は三女・安芸子を交通事故で失い街頭での交通整理を始め、交通道徳の昂揚を訴えたのが、我が国交通安全運動の始まりと言われている。

風運児の歩いた道

外史直筆の日誌（山口明倫館入退学前後等、年月記憶

違いによる齟齬を除く、生たちから晩年まで克明な記録）や書簡・回顧・揮毫類からその足跡を辿ると、往時の社会事象や外史の赤裸々な懊悩をも覗える。

玖珂郡柳井町（現柳井市）宮本浜での飛行実演。遠隔の地から汽車できた人々を合わせ三万人の観衆がつめかけ、母時の婚家の野村殼一郎を連れ、馬で会場に出かけた。

母時の姉梅子の婚家の守田夫婦。忠蔵が実家に帰り、長岡家に養嗣子にいってしまったのをひどく悲しんで、「夫婦共に恋々とし」そのために家事を放ったらかして、彦右衛門は酒で寂しさ悲しさを紛らわし、遂に破産してしまったという。なお、外史は明治三〇年、乳母浴永クマの墓を建てて手厚く葬った。

堀家に戻った忠蔵は、花岡の石田潔塾に学ぶ。時には、都濃郡河内村鷲頭山（標高２５０ｍ）妙見社（現降松神社）中宮まで遠出し遊んだ中宮公園に外史書「周防第一苑（大正八年五月建立）」石碑がいまも佇む。「この子はきっと偉くなる」そう見た教師と教え子の間にだけは心が通いあった。のちのち外史は幾度も恩師を訪ねている。叔父の小川文右衛門、「村の鼻つまみの悪たれで、その悪名が隣り村まで聞こえだした」という利かん気のいたずらぶりが気に入ったと、自ら仲人をかってでた。

一九一六年（大正五）、萩では、九月二〇日から二五日まで、飛行実演と講演を七回に亘って開催している。九月一七日、山口明倫館で学んだ町。桜畠練兵場（現陸上自衛隊駐屯地）の飛行実演は数万の観衆を圧倒した。

一八八五年（明治一八）、陸軍大学校第一期生の卒業も近かった一一月五日から一八日間、メッケル少佐（独国から招聘した教官）指導のもと、水戸街道で参謀旅行（山野演習）が行われた。宿利重一著『児玉源太郎』によると、「大学を出て参謀本部の陸軍部に出仕した歩兵大尉長岡外史、砲兵大尉藤井茂太は、機会ある毎に熱心に上層部に進言した。メッケル少佐の偉大性を認識していても、その統裁の下に参謀旅行をしようという動向は見えなかったが…」一八八六年（明治一九）九月三〇日、参謀本部第一局長の児玉源太郎が陸軍大学幹事

も兼任となったので、外史らの希望が叶えられ制度化された。

一八九三年（明治二六）四月、少佐に進級すると同時に近衛歩兵第四連隊付となった。当時陸軍省次官の児玉源太郎は二つの兵站関係委員長をも兼務。児玉源太郎が山縣有朋の意を読んで、東海道線や山陽線が開通しない時代、紀州・淡路に名目をつけて外史を引っ張り出しついでに都濃郡徳山村橋本丁（現周南市）の児玉の家に行かせる。そこに意外にも、実父と名乗る小方謙九郎が待っていた。都濃郡栗屋村（現周南市）温品家の二男謙吉。のち、熊毛郡上関（現熊毛郡上関町）小方家の養嗣子となり第二奇兵隊参謀を務めた。温品家と下之堀家いずれも由緒ある家柄、坂本川を隔てただけの隣り村の大庄屋。両村が協力し堀川の樋門造り工事をやったこともある。

一九二一年（大正一〇）、業界紙「薬石新報」に、「三十年前の飛行機研究」という記事があった。「一八九四年（明治二七）、大島混成旅団参謀・第一軍兵站長岡参謀長は日清戦争の前戦を指揮した。大島混成旅団の第一野戦病院付の陸軍一等調剤師として京城郊外に出動していた二宮忠八は発明家でもあり、『飛行器の採用法を願い出たところ却下された』、『人間が空を飛ぶことが出来るかどうか、そんな夢のような、軽業のような機械を作る等ということは信用できない。ことに現在は軍事多忙の時であるから、折角の発明であるが採用はできない』云々」この記事を読んだ外史は巻紙に長文の詫状を書いて二宮忠八に送った。「大島旅団長閣下は・・・　必ず小生にその採否をどうするかを御尋ねになったに違いない。小生はその当時、飛行機気分の全くない時であった。その上成勧、牙山の強敵をいかにして打破するべきかを、馬車馬的に考えこんでいた最中であったから『とてもこんなものは駄目でございます』と答申したに違いない・・・　」。京城から平壌へ通ずる道路上の開城あたりで、一戸少佐が率いる第一大隊の先発部隊が非常に苦戦をしていた。外史は京城倭城台下の一民家に、椅子とテーブルを並べた、臨時の第五師団司令部にあって、前線部隊の戦況を見守っていた・・・　外史は忠八の功績を

機関誌第二巻一一号（一九二一年）に発表するとともに、一九二七年（昭和二）一日発行の「帝国飛行協会会報」の第一〇号や「日本航空略史」の第一編第一期に「日本航空界の先駆者」として、日清戦争当時の二宮忠八のことを詳報。忠八は、昔の苦労が報いられたとして、京都府の八幡（京阪電車の八幡駅下車）嵯峨の磐船神社祭神「鏡速日命」を分霊、外史が名付けた「飛行神社」に祀った。同時に忠八が苦心して研究した跡をしのぶ資料を陳列する飛行記念館を建てた。外史は自筆の書をこの飛行神社に寄進。

慶応病院の北川博士によると、一九三一年（昭和六）頃から外史の病気は進んでいたようである。一九三三年（昭和八）春、何回かの手術がなされたが、四月二一日巨木が仆れるように目を閉じた。七七歳の生涯であった。

遺言に沿うべく、超法規手続きでの秘密裡の航空葬。

遺言六ケ条の中に「太平洋の水長えに静かなれ」

磯子（長女）の詠

「ま珠とし沈み果てつ大き人の
み霊は永に生き給うべし
太平洋永久に守護ると父上の
御遺言なりぬ海しずかなる」

あとがきにかえて

児玉源太郎に抜擢・重用された後藤新平が残した言葉によると、「金を残して死ぬものは下 仕事を残して死ぬものは中 人を残して死ぬものは上」。

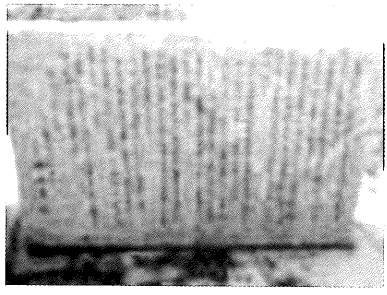
児玉源太郎から陰に陽に支援を受け続けた長岡外史は、将来、太平洋が争いの海とならないよう、己れの屍をも平和の礎に・・・ との遺言状（六ケ条）を残した。

徳山に生まれ疎開・転入した烏帽子岳（412m）裾野の里にて記す

主な参考引用文献・参考引用資料

宿利重一著「児玉源太郎」マツノ書店
外山三郎著「図説 日露海戦史」内外出版
戸田大八郎・岡田憲佳「人間 長岡外史」長岡外史顕彰会

長岡外史文書研究会編著「長岡外史関係文書 回顧録篇」
長岡外史文書研究会編著「長岡外史関係文書 書簡書類篇」
岡田憲佳著「先駆者の歩いた道」長岡外史顕彰会
頼山陽著「日本外史（天保七～八年頃作）」藤高一男編著
新田次郎著「八甲田山死の彷徨」新潮社
山口県編「防長歴史暦」歴史図書社
下松市教育委員会「下松市の石造文化財 祈りと生活」
清水素著「防長歴史探訪 第四巻 外史公園」山口銀行（50th.）
石川卓美著「防長歴史用語辞典」マツノ書店
児玉幸多編「日本史年表・地図」吉川弘文館
平凡社「国民百科事典」―日本の婚姻史―
中西輝政著「桂 太郎」歴史街道２００８年11月号
ＰＨＰ研究所
中西輝政著「児玉源太郎」歴史街道２００９年２月
ＰＨＰ研究所
江宮隆之著「後藤新平」歴史街道２００９年２月号
ＰＨＰ研究所
秋月達郎著「後藤新平」歴史街道２００９年２月号
ＰＨＰ研究所
青山 佾著「後藤新平」歴史街道２００９年２月号
ＰＨＰ研究所
山内昌之著「児玉源太郎」歴史街道２０１６年５月号
ＰＨＰ研究所
吉田一彦著「欧州大空襲」歴史街道２０１６年10月号
ＰＨＰ研究所
〈
吉田一彦著「欧州大空襲」歴史街道２０１７年３月号
ＰＨＰ研究所
小林道彦講演「新史料から見た児玉源太郎」周南市立美術博物館
－近年、児玉源太郎自筆の書信・手帳類寄贈される－
小山良昌講演「児玉源太郎」学び・交流プラザ歴史講座
小山良昌講演「幕末の徳山藩」徳山大学地域文化講座
小山良昌講演「児玉源太郎と徳山」徳山大学地域文化講座
森重祐二講演「児玉源太郎と日露戦争」徳山地方郷土史研究会



写　真

右上　周防第一苑（外史書）

右中　国家忠勇（破損）（外史書）

左上　長岡外史像（馬越正八作）

左中　顕彰碑（岡田憲佳撰文）